



レ・ボーを訪ねて

Visit to Les Baux de Provence



吉田 英雄*
Hideo YOSHIDA*

勤続30年目のフレッシュアップ休暇制度を利用して、昨年6月上旬、妻とフランスへ旅行した。妻とは新婚旅行以来の海外旅行である。以前、友人からボーキサイトの発見された場所が南仏にあると聞いており、どのような場所なのか関心があったので、この際、訪問してみようと考えていた。妻は中世フランスに関心があり、それを舞台にファンタジー小説を書いていたので、カルカッソンヌ (Carcassonne) のシテとアヴィニョン (Avignon) の法王庁宮殿を希望した。これらを満したツアーはなかったので、自らインターネットとトーマスツクの時刻表をもとに、パリ (モンパルナス) からトゥールーズ (Toulouse)、カルカッソンヌ、アヴィニョン、パリ (リヨン) とTGVでフランスを一周する旅行計画を作り、日本でホテルとTGVの予約と5日間有効のセーバーパスを購入して中部国際空港セントレアを旅立った。

フランス国内では、パリで一泊後、二日目はモンパルナスから約5時間かけてトゥールーズに行き、旧市街を散策した。車窓からの風景を楽しもうと鉄道にしたが、パリからボルドーまではほとんど平坦で、地形の変化の少ないことに驚いた。三日目はトゥールーズからカルカッソンヌに行き、丸一日、シテを見学した。四日目はカルカッソンヌからアヴィニョンに行き、法王庁宮殿を訪れた。午後はセーバーパスを有効に活かしながら、鉄道で1時間ほどの距離にあるアルル (Arles) に行き、ローマ時代の雰囲気が残る市内見学後、アヴィニョンに戻った。

五日目、念願のボーキサイトの発見されたレ・ボー (Les Baux) に行くことにした。ボーキサイト (Bauxite) は、よく知られているように、1821年このレ・ボーで発見され、この地名をとって名づけられた。レ・ボーには、この季節直接行くバスがないことはわかっていたが、乗り継ぎや帰りのバスを探すのが結構大変だったので、タクシーを用いた。アヴィニョン中央駅前で運転手と交渉し、往復と現地での待ち時間を入れて60ユーロで行くことにした。片道40分ほどで、白い岩山の上にある城塞跡に着いた (写真1)。見渡すとこの一帯は結構白い岩が突き出している山の多いことがわかった。これは前日にみたアルルとアヴィニョン間の車窓からの風景も同じであった。現地で購入した観光案内書によれば、この一帯はアルピュ山脈の端に位置し、アルプス山脈とピレネー山脈が形成された地殻変動の時に海底から隆起してきた石灰岩の地層であるとのことであった。ボーキサイトはオーストラリアのような広い褐色の大地で露天掘りにより採

鉱しているイメージがあったが、このような石灰岩の地層で見つかったことが驚きであった。長い間アルミニウム材料を研究していてもあまりその鉱石にまで遡ることがなかった自分を恥じた。岩山の麓は一面オリーブや葡萄畑で、褐色の土もみられたが、1821年当時、このような土壌から、何故「粘土からの銀」と言われたアルミニウムを含むことがわかったのかさらに調べてみたいと思った。

白い岩山の上の城塞跡は観光地となっており、細い路地りいっばいに土産物屋が並んでいた。レ・ボーの名は、切り立った岩山を意味するプロヴァンス語に由来し、その名の通り岩山自体が要塞で、上からは遠く南プロヴァンスが見渡せるようになっていて、すばらしい光景であった (写真2)。中世には城塞が築かれ、南仏最強と名を馳せたレ・ボー一族、別名「鷲の一族」とも呼ばれ栄華を極めていたが、一族の血筋が途絶えると城壁は17世紀には撤去されたとのこと。ここはまた松本清張の小説「詩城の旅びと」の舞台ともなったところでもある。

さて、ボーキサイトの採掘された場所は、現地に行けばすぐにでもわかるものと思っていたが、特に案内もなく時間の関係で探すのを諦めた。帰国してから現地の案内書を読むと、城からみて遠くの山裾で赤茶けて見える場所が採掘地点とのことであった。インターネットのGoogleマップで航空写真と重ねてみると、場所がほぼ特定できたので、次回訪問する機会があれば是非行きたいし、もし読者で訪れた方がおられたら、現在どのような状況かをお聞きできればと思っている。

この日の午後はこれもローマ時代の水道橋があるポン・デュ・ガール (Pond du Gard) に行くことにした。昔から写真では知っていたが、やはり百聞は一見にしかずで、その大きさを実感したいと思った。アヴィニョンからバスで45分ほどの距離にあり、実際に見てみるとさすがに大きい。当時の設計技術、土木技術のすごさに驚くばかりである。帰りは運良くタクシーが待機していたので、これに乗って次の目的地、織物のデニムで知られたニーム (Nimes) に行き、古代ローマ時代の円形闘技場を見学し、その後、鉄道でアヴィニョンに戻った。

六日目はアヴィニョンTGV駅から約3時間でパリ・リヨン駅に着いた。この時期、午後は長いので、急行で1時間ほどの距離にあるオルレアン (Orléans) に行き、「ジャンヌ・ダルクの家」を訪問した。七日目は、パリのカルチェ・ラタンを散策し、パリ大学内にある鉱物博物館を訪ねたが、改裝

*住友軽金属工業(株)研究開発センター (〒455-8670 愛知県名古屋港区千代3-1-12)。Research & Development Center, Sumitomo Light Metal Ind., LTD. (3-1-12, Chitose, Minato-ku, Nagoya-shi, Aichi 455-8670).
受付日:平成19年6月5日

工事中であった。その後、小説や映画「ダ・ヴィンチ・コード」の舞台ともなったルーブル博物館などを訪ね、翌日、名古屋に戻った。

日本に戻ってから、気になっていたボーキサイトの鉱床について調べていると、森永卓一先生の「アルミニウム精錬」(日刊工業新聞社、1968年)3ページの脚注に、先生は1961年6月末にレ・ボーを訪れたと書かれているではないか。巻末の先生の著者略歴から判断して、56歳の時に訪れたことになり、奇しくも小生と同じ歳に訪問され、何か因縁のようなものを感じてしまったが、日本のアルミニウム研究の先駆者のお一人である先生の受けた印象はどのようなであったかを知りたいと思った。なお、嶋崎吉彦氏らのレポート ([http://](http://www.gsj.jp/Pub/News/pdf/1964/11/64_11_03.pdf)

www.gsj.jp/Pub/News/pdf/1964/11/64_11_03.pdf)によると、レ・ボーのボーキサイトは白亜紀前期あるいはジュラ紀の石灰岩の風化作用によって生成し、鉱床生成後に沈降して海中に没して白亜紀中後期の石灰岩が堆積し、その後再び隆起して現在に至ったもので、現在はこここの鉱床は掘りつくされているとのことであった。いずれにしても、レ・ボーの旅はアルミニウムの発見当時の先駆者たちの苦勞がどのようなものであったかをあらためて思い起こさせてくれた旅であった。妻も自分のフランス旅行記をアップロード (<http://www.asahinet.or.jp/~YQ5Y-YSD/>) しているので、関心のある方は見ていただければ幸いである。



写真1 城塞跡のあるレ・ボーの白い岩山



写真2 城塞跡から眺めた南プロヴァンスの光景